

# 超能力王と言われた「三田光一」

サイキックキング

文 秋山真人

Text by Makoto Akiyama

## スーパーパーソナル 超自分能力開発の近代史

「超能力」オウム事件以後、この言葉が、メディアに出ることは、とても少なくなつた。スプーン曲げなども、手品やメンタリストの芸と思つている若者が増えていくが、念の力で金属を曲げる現象が、はじめて公けになったのは日本の明治時代で、そのことは前回書かせていただいた。催眠状態下で「あなたには見えない力がある！」という暗示を与えられた人が、硬い金属の火箸を小指で軽く触れるだけで曲げてしまったという記録が存在するのである。

この超常的な能力が、最も話題になつたのも、明治から大正にかけての時期なのだ。東大の助教授であつた福来友吉博士（一八六九〜一九五二）が、多くの千里眼能力者を発掘し、大新聞を巻きこむ大騒ぎになる。これは映画「リング」のモデルになつた有名な話だ。

福来博士は、たぶん日本ではじめて催眠術の研究で博士号を得た人であり、「催眠心理学」という著作がある。

この頃に、福来の実験台にもなり、超能力王とも言われた男性能力者に、三田光一（一八八五〜一九四三）がいた。そもそも、三田は、若い頃から、千里眼がきくということで政財界の人々がつめかけていたらしい。

統計でも、体験者は7割近くにのぼる。

つまり、今の科学のわく組みでは正体は判らないが、多くの人が体験しているのが、超能力なのである。

もし、あなたが、人生の中で、とてもむずかしい問題にぶつかったとして、あらゆる手段をもってしても、答えが出なかつたとしたら、「理由はわからないが心の中にわき上がってくるアイデアやイメージ」を解決のヒントにすることは、重要なトライアルかも知れない。

私たちには「神様」に祈る前に、まだまだやれることがある。

三田光一の修法は簡単であるが、こういった未知なる力を引き出す為に古来伝わっている方法の多くは「言葉」や「呼吸」「ポーズ」などの日々の（くり返し）である。宗教ではこれを儀式と呼ぶが、スポーツ界では、ゾーンに入る方法論、つまり、超越的な能力を出す為のちよつとしたポーズや動きなどとされる。

ラグビーで、独特な手の組み合せをしたりする選手が話題になつたことがあるが、意外にそういう事が能力開発には必要なのである。

精神世界、能力を知る世界は、どんな分野の人間にとっても「魔法の御料理」のようなものだ、と私は思う。

大正六年の名古屋毎日新聞には、二月五日付で、三田が警察に協力して犯人を見つけたという話が載っており、それに前後して旅館の火災を予知したり、代議士候補者の当落と得票数を当てたと報道されている。

晩年、呉羽工業化学（クレラップで有名）のオーナーで、韓国で優秀な水源を発見し、取締役に名を連ねたこともある。

しかし、何と言つても三田を注目させたのは、「念写」という現象だつた。頭の中に浮かべたイメージを写真に写しこむ、ハテナマークがいくつもついてしまふような不思議な現象を示したとされる。

当然、本当だ、ウソだ、手品だ、インチキだ、など世論の論戦は盛んだ。だが、原理はともかく、三田は、むずかしい念写の実験に次々に挑戦してゆく。歴史上の人物、空海の尊顔を念写したり、月の裏側の念写まで行つた。

また三田は、他者の能力開発にも積極的に取り組み、三田善靖という本名で『霊観』という能力開発のテキストを一九三二年に出版している。犬養毅（二八五五〜一九三二、第二十九代内閣総理大臣）が題字をよせ、呼吸法を中心とした精神統一法を提唱した。その中で彼は、霊的修養についての定義を

おいしいからと言って、食べすぎは、もちろん害となりうるが、月一回位ゆつくりと味わうのは至福である。

しかし、さらに、その味が「おいしい」のはなぜかということ日々学んでおかなければ、そこへたどりつくのは不可能だ。

伝統宗教のほとんどが、日々の祈りや、行法や、言葉の唱行などを説くのは、自分の中にある「魔法の御料理」に至る道なのだ。

達人たちの日々の学習トレーニングがそれにあたる。気がつく、と彼らは、精神世界を説く道にたどりつく。

アイルトン・セナは、神の手が、自分を前に押し出すのを、はつきりと身体で感じると言っていたし、ジョン・レノンのイマジンは、口ずさむたびに今も「この世的でない」幸せな世界の香りを、私たちに感じさせてくれる。何かを信じなければ……ということではない。

自分の中にある幸せの種を見つける「方法論の探検」こそが、大切なのだ、と思う。

今回は、藤田西湖、陸軍中野学校のカリキュラムを作つた、甲賀流十四世。忍術と霊術とスパイ教育という小説より面白い事実に触れてみたい。

簡潔に述べている。

「論議や理屈のものではない。もちろん、時の流行物でもない、といふて、道学的人物の仙教において修得する秘法、荒行等を意味するものでもないのである。要は、その実行によって、堅実なる自己を認識し、生活の内容を豊富ならしめ、己を信じ、己を愛し、己の義務と責任を尽くして、――中略――意義ある人生と幸福なる生涯を送るべきである、まったく意義ある人生は修養なくして存在するものではない」

本書『霊観』では三田の説く修法が、判りやすく解説されており、中身は本当に簡単な呼吸法である。

鼻より息を急速に吸い入れて胸を膨らまし、同時に腹をくぼませる。一〜二秒間をへて、鼻より息を太くかつ強く急激に出すとともに、下腹を「ウン」と発声して激しく押し出して膨らます。これを繰り返して、約二分間、四〇回内外を行うとしていっている。それを、座つた状態やあぐらをかいた状態、椅子に座つた状態、立つた状態、仰臥した状態、つまりは、生活のあらゆるシーンで気軽に行うことを促している。

超能力のある・なし議論は、今も続いているが、そのかたわら、超能力という言葉や、直観や、虫の知らせ、などという言葉に置きかえらると、近年の藤田は中野学校の創立にかかわつた重要な歴史的人物であると同時に、少年時代に、すでに千里眼少年として注目され、福来友吉博士の超能力の実験台になつていたという記録が存在するのである！

### Profile

大正大学大学院卒。十代の頃、スプーン曲げ少年として取り上げられ、警察、郵政、雑誌編集長など様々な職をへて、現在は、モバイル企業の大手顧問、コンサルタント、さらに画家としても活動している。イマジニア株式会社にて立ち上げたモバイルコンテンツ、「開運夢診断」は、二億アクセスを超えるメガヒットとなった。国際気能法研究所所長。マインド・アンティーク博物館館長。宗教・スピリチュアル、精神世界のアドバイザーとして長老的存在。一九六〇年生まれ。分野の垣根を越えた広い人脈と交流。

